

# 博士論文 概要書

「思想の科学」の思想およびその方法

The Thought and Methods of 'Shisō no Kagaku' (the Science of Thought)

早稲田大学大学院社会科学研究科

地球社会論専攻 日本文化論研究

横尾 夏織

## 1. 本論文の目的

本論文は、戦後間もない1946年に創刊され、1996年に半世紀の刊行の幕を閉じた雑誌『思想の科学』と、その編集・研究母体である「思想の科学研究会」（以下、両者を合わせて「思想の科学」）の思想と、その方法に着目して、戦後の論壇で生じた諸論点に含まれた思想的課題と、それを取り巻く状況の一端を明らかにしたものである。

従来、「思想の科学」は、中心人物である鶴見俊輔の思想と、安保闘争、ベトナム反戦運動などに関連して言及されることが多い。しかし、多いときには200人以上が在籍し、雑誌の編集・刊行と研究が行われながら、鶴見一人にその発想から成果までを還元するのは妥当ではない。もちろん、鶴見の思想が「思想の科学」の特徴の無視できない部分を構成していることはたしかなので、本論文でも常にこれを参照したうえで、他の主体が「思想の科学」の思想と方法に与えた影響を明らかにし、双方の絡まり合いにおいて特徴を把握するようにした。また、「思想の科学」を取り巻く知的状況、とくにマルクス主義に拠る人たちとの影響関係にも注意を払い、「思想の科学」の論壇における位相の一端を明らかにした。

## 2. 各章の概要

### 第1章 「思想の科学」の概略

本章は、各時期の「思想の科学」の特徴と、第3次、第4次の終刊を決した2つの事件の概略を押さえることにより、次章以下の議論の基礎を提供している。

すなわち、第1次の、社会心理学と分析哲学を用いた観察的な方法への反省から、第2・3次は生活綴方を主たる方法とする。しかし、組織の急激な膨張が一因となってサンデー毎日事件がもたらされた。事件への対応をめぐっては、研究会内の知識人と大衆の「抜きがたい溝」の存在が露わになった。

第3次から第4次までの4年間の休刊期には、転向研究会はじめ、「研究会」としての内実を充実させる活動が見られた。第2・3次の膨張期に入会し、この期間に研究を持続した会員が、第4次以降の「思想の科学」を形づくっていく。

天皇制特集号事件と、それに続く第5次は、安保闘争後と新左翼運動、大学紛争という状況にあって、思想と運動、思想と政治の境目の引き難さが繰り返し問われている。第6次を経て第7次では「戦後民主主義」を前提とする「反ファシズム」の立場が掲げられた。

### 第2章 戦争体験と世代——「実感」論争から見えてくるもの

本章は、1950年半ば、「戦後」は終わったとの言説に触発されて生じた議論から、社会、論壇とジャーナリズムの変容の一端を明らかにしたものである。

まず、「実感」という概念に含まれる諸論点を、「思想の科学」内外の議論から、マルクス主義の理論、ならびに戦争責任を背景とする世代論との絡み合いにおいて示し、「思想の科学」における戦後派の「実感」の主張と、それを繰り入れようとした戦中派の意図を明ら

かにした。

次に、「思想の科学」における「実感」の意義を、主として鶴見和子による生活綴方の理論と実践、および鶴見俊輔の行動への接続を重視するプラグマティズムの文脈で明らかにした。さらに 60 年代にかけての専門思想家でない書き手の登用と編集への環流、市民主義の展開を追い、理論と実感という二項対立の自明性の動揺と、「日常性」に批判的に対峙しつつ、そこから生起する思想を汲み取ろうとする路線への転換を跡付けた。

### 第3章 転向研究会概観——前史、活動、成果

本章は、「思想の科学」の思想の場であり方法であるところの小集団の代表例として「転向研究会」を取り上げ、その共同研究の特徴を明らかにしたものである。

前半では、まず、『共同研究 転向』の、共産主義・社会主義者に限らない「転向」の概念に対し、年長の転向体験者や左翼知識人から向けられた違和を紹介し、次に、『思想の科学会報』に表われる転向研究会に関する記事、報告から共同研究の過程を跡付けた。そして、各メンバーが転向研究へと赴いた動機を、著書ならびに『思想の科学会報』の記述から明らかにし、それぞれの戦中、敗戦、そして戦後体験の重なりと差異から、彼らにとってアクチュアルな問題として転向研究への求心性が生じている点を明らかにした。

後半では、『転向』の内容につき検討した。まず、上巻巻頭に置かれた鶴見による方法論から、前項でみたような「私的体験」を媒介に転向を「追体験」という方法がとられていることを確認した。次に、藤田省三による状況概説、各論の内容を概観し、マルクス主義とは異なる歴史の記述が目指されており、またここで得られた実践の手がかりが、安保闘争に生かされていることを確認した。

### 第4章 転向研究会の共同性——インタビューから

本章は前章に引き続き転向研究会を取り上げ、中心的メンバーの鶴見俊輔と、初期からのメンバーでありながら成果を自身の論文として発表しなかった石井紀子へのインタビューにより、その共同性を複眼的に照射する。

鶴見においては、戦中に得た研究のモチーフがどのように転向の共同研究へとつながっていったかを跡付け、さらにその後の思想的展開ならびに社会運動の理論と実践の特徴との関連においても考察した。

石井のケースでは、まず戦中・戦後の少女時代の体験から「思想の科学」、転向研究会へと参加する経緯を跡付け、次に研究の成果を出せなかった一因ともなったプロフェッションと家庭の問題、転向研究会終了後も「思想の科学」に関わり続ける中で形成された「実務家」としての存在意義などを明らかにした。

## 第5章 2つの天皇制特集

本章は、戦後思想における最大のアポリアともいうべき「天皇制」がどのように捉えられ、語られてきたかを、『思想の科学』における議論、とくに60年代と70年代に編まれた特集と連載を時系列で追い、それにより『思想の科学』の方法、とくに知識人とそうでない者の視点の差異と交錯の様相を明らかにした。

まず、戦後各分野（法学、歴史学、政治学など）で行われた天皇制をめぐる議論を概観した上で、丸山真男、鶴見俊輔、小田実それぞれの言説から天皇制をめぐる問題系を抽出し、それぞれの立場を明確にした。また2つの特集から、天皇制論が戦後社会の変容とともに実体的な捉え方から構造的な社会圧力を指すものへと拡大し、さらに女性の視点を経由して拡散していくさまを跡付けた。

## 第6章 階級の解体と主体のゆくえ

本章は、「(新)中間層」ならびに「中流意識」をめぐる議論に表われた階級観の動揺を、戦前の言説からの連続性と戦後社会の変容の過程において考察するものである。

前半ではまず、1970年代後半の「新中間層」をめぐる議論を整理した上で、その「多数性」と社会変革の主体としての可能性についての多様な評価を、戦前の初期社会主義、マルクス主義、国家社会主義における「中間階級」をめぐる議論からの連続性において捉えた。そして、1950年代半ばから1960年代にかけての「中間層」「中流」の捉え方をさらい、とくに、藤田省三による、多数者の「欲望ナチュラリズム」への警戒と、それとは対照的な加藤秀俊の、「あたらしい市民層」への期待を取り上げ、両者の接点に「転向」への思索があることを明らかにした。

後半では、1960年代から70年代かけて「思想の科学」で議論された、従来の運動論で取りこぼされてきた「人間性」「人間らしさ」についての議論を、高島通敏の「伝統」、大野力の「実務」、小田実の「生きている思想」といった概念との関連において明らかにした。これらの議論は、運動と産業社会の双方から疎外されてきた女性たちにより批判されるが、やがてより切実に共感し合える読者を求めて彼女たちが離れ去っていく経過を概観し、「思想の科学」という場、ないし雑誌という媒体がはらむ、編集者と執筆者のアンバランスな関係の帰結を示した。

## 終章 「思想の科学」の変遷と意義

本章では、これまでの論点を時系列で追いながら総括し、「思想の科学」が論壇ないし戦後社会の中で果たした役割とその思想（史）的意義について検討した。

「近代」のやり直しの意図も込められた「科学」から記述的な方法への移行は、当時のマルクス主義の方法と接近し、共産党の内紛の過程ではじき出された、戦後の運動経験のある人たちが「思想の科学」に入ることもなった。このことは、知識人のサロンの集まりで

あった「思想の科学」に大衆とのつながりを与えるものともなったが、「大衆」であることを利用して論壇ないしジャーナリズムに入ろうとするスターダムの問題を惹起し、「大衆」から「知識人」への上昇志向が渦巻く場においてヒエラルキーを再生産した。

「思想の科学」が60年安保闘争の際に示した「市民」という概念は、職業人と生活者を含みこむ主体概念であった。前者には管理者やホワイトカラーによる現場での社会改良を意図する「実務の中の思想」が含まれ、後者には家庭における食、環境といった視点からの暮らしの組み替えをも含むことが可能であり、生産現場での労働者や、貧困層といったように狭く捉えられてきた主体概念と、運動ないし実践の概念を押し広げた。また上記の「実務の中の思想」と意図は共有しながら政治的な運動とは一線を画す、職分の発揮の仕方としての「実務家」は、「思想の科学」が孕んできたヒエラルキーを相対化するようにはたらいだ。

80年代に「思想の科学」は「反ファシズム」を掲げるが、それは戦争体験、敗戦による価値転換の経験、戦後の運動の挫折経験等を共有する戦後民主主義への希求を基底に持つそれぞれの立場の有効性が薄れゆく中での、いわば時代外れの回帰だった。

しかしそれぞれの立場は一生をかけて貫かれており、状況の変容の過程で有効性を喪失しても、当時の状況ごと評価した場合の意義は失われていない。

本論文により、鶴見を中心とした知識人の集まりとしての「思想の科学」というイメージよりは、多様な主体の関与と活動の様相が提示できたと思う。今後はここで捉えきれなかった新たな主体と論点の再発見、その背景の解明を通し、戦後思想の複眼的な理解を進めることとする。また、異なる社会における「戦後思想」との比較という課題にも取り組みたい。